

世界仏教文化研究センター
リレーエッセー

コロナ社会で共に生きるために
No. 2

如何にいきるべきか



基礎研究部門長
龍谷大学文学部教授
楠 淳證

本日（7月10日）のニュースを見ると、東京や大阪等でコロナ感染者の数がまた増加してきたとの報道が相次いでいます。特に若い方々の感染者増にともない、今後の高齢者への感染が危惧されるということでした。前回の緊急事態宣言の折りには、「大好きなおじいちゃんやおばあちゃんにうつすようなことになると嫌なので学校の再開をまってほしい」と嘆願した高校生がいました。身近な家族を案じる純真な心に、感動をおぼえたものです。

私にも3人の子がいますが、前回の緊急事態宣言の折りには、「誰もがコロナウィルスを持っている可能性があるそうだから、お父さんお母さんにうつすのが心配なので帰らない」といって帰郷を差し控えてくれました。おそらく、私も20歳代であれば、子供たちと同じように行動したのではないかと思います。しかし、私もすでに63歳。父も母もすでに亡くなりました。もし存命であれば、心配でたまらなかったことでしょう。なにしろ、家族を失うことほど、つらいものはないからです。しかし、龍谷大学の建学の精神は浄土真宗の精神でした。阿彌陀如来のご本願を常に聞いてきた私にとって、亡き父も母も今や私と共にある存在となってくれました。今回のコロナ禍に限らず、人は大切な人を次々に失っていきます。広く目を展くと、たくさんの悲しみのすがたが見えてまいります。さて、私たちはどのように生きたらよいのでしょうか。

平成18年(2004)6月3日に、私の父は亡くなりました。肺癌による入院治療から通院治療に切り換えた矢先の5月中頃に、どうやら治療を受けていた病院で肺炎の菌をもらったようでした。苦しそうにしている父を見かねて、病院に連れていったのですが、即入院でした。いつもならすぐに病院にしてくれる父が、その日は嫌がりました。自分で身体の異変に気づいていたのでしょうか。3日ほどして家内から電話があり、「病院の先生がお話をしたいのでお出でいただけませんかとおっしゃってる」とのこと。私は寺院の住職でもありましたから、家族を自坊に残しての単身赴任が13年目となっていました。その日は龍大勤務のために京都にいましたが、知らせを聞いて即座に帰ることにしました。車で2時間半かけて家に戻る途中も、不安でいっぱいでした。急いで病院に駆けつけると、先生が個室に呼び入れてくださって、レントゲン写真を3枚見せてくださいました。「なんでしょうか？」と問う私に、「これが2日前、これが昨日、そしてこれが今日の写真です。だんだん白くなっているのがわかりますか？」と問われる。「どういふことでしょうか？」と再度尋ねると、「あと一兩日の命です」とおっしゃいました。「どうされますか？」とお尋ねになるので、「連れて帰ります。最期は我が家で看取ってやりたいので・・・」というので、「わかりました。すぐに救急車を手配します」といってくださいました。父はそのとき、集中治療室で酸素ボンベをつけて呼吸している状態でした。私が部屋に入っていくと、ホッとした顔で頷いてくれました。おそらく、私の顔は陰しい表情をしていたと思いますが、父はいつもどおりの穏やかな優しい顔で迎えてくれました。「帰るよ」というと、また一つ頷いてくれました。その時の状況を思い返すと、父はもう自分の命の尽きることをわかっていたと思います。

救急車に乗せられて帰った父は、その後、5日間いてくれました。一兩日といわれていたのに5日間も命があったのは、家に帰ってきた安心感からだったのでしょうか。私は父に「もう幾ばくもない」ということをいふことができませんでした。しかし、父はわかっていました。なぜならば、家に帰ってきたのに酸素ボンベで呼吸する状態でした。しかも、大量の酸素が送り込まれているにもかかわらず、それでも息ができなくなる苦痛に襲われることがたびたびあったからです。また、ごく近い親族のみには知らせていましたから、慌ただしく駆けつける親族の姿も見ていました。父はすべてをわかっていたのに、いつもと変わらない穏やかな姿でした。甥のために祝い袋の文字を書くことになりましたが、数文字をやっと書き上げてから「もう書けないな」と一言、静かにいいました。それがすごく印象的でした。

看取っているあいだ中、私は父とごく普通の会話をしていました。亡くなるその日まで、ベッドのそばに布団をひいて、毎日、話しかけました。初めて父の爪も切ってあげました。京都での大学勤務になってしまったばかりに、住職でありながら京都に単身赴任する息子を支え、お寺の大切さ、ご門徒の皆さんとの心の交流の大切さ、こつこつと人生を歩む尊さを教えてくれた父でした。もっとも大きなことは、私が「おみのり」に出あう機縁を与えてくれて、陰に陽に「お念仏の心」を伝えてくれたことでしょうか。最期の時の全く死を恐れず動じない姿、いつもと変わらない穏やかさは、100万の言葉を超えた「無言の説法」であったと受け止めております。

葬儀を勤め、お骨を拾い、7日ごとの中陰法要を勤め、49日の満中陰法要を勤め終え、そしてお骨をお墓に納めました。その間、私は悲しいはずなのに、不思議と涙が出てきませんでした。半年がすぎ、その年の12月30日のことでした。例年のごとく本堂のお内陣のお荘厳（おかざり）をしていた時のこと、ふと気づくと私の顔は涙でびっしょりと濡れていました。毎年、一緒にしていたお荘厳。「本当におらんようになったんやな」という深い感慨がおこると同時に、『阿弥陀経』に出てくる「俱会一処」の言葉が頭に浮かびました。「そうだ、また会える世界がある。お念仏を称えるところ側にいてくれる」という思いが次に起こりました。ごく自然の思いでした。それ以来、いまだに喪失感はあるものの、「私が往くまで待っていてくれる」との思いが続いています。

雪山童子の無常偈として有名な言葉に、「諸行は無常なり 是れ生滅の法なり 生も滅も滅し尽くす 寂滅をもって楽となす」というものがあります。その意味は、「この世のものは皆な儚く、現れては滅びるものである。そのような生死（生滅）の執われを離れたところに、真実の安らぎ（寂滅）が現れる」ということになるのでしょうか。人の命ほど不確かなものはありません。昨日は元気だった人が、もう今日には亡くなっている。そんなことが多々あります。そして、人が亡くなる時には必ず「亡くなっていく人の思い」と「遺される親族の悲しみ」があります。連日に及んだコロナ感染者の数、亡くなられたお方の数、それを見ている内に胸が締めつけられるように思いました。あの方々は、どんな思いでコロナ感染に立ち向かわれたのだろうか。そして、ご家族は……。その一端が志村けんさんや岡江久美子さんのご家族から伝わってまいりました。看取ることもできず、お葬儀さえもしてあげられない。何という病気が広まるのかと暗澹たる思いが、いまなお消えずにあります。皆さんも、おそらくそうだろうと思います。私は父を看取ることができたのに、また葬儀も心を込めてすることができたのに、それができない方々がいらっしゃる。何と悲しくもつらい病気が広まってしまったのかと、いまなお心の落ち着きどころがありません。

ところが、人は自分の死をなかなか見つめることができません。どこかで自分は大丈夫と思っています。かつて、お釈迦さまは次のようにお弟子たちにおっしゃいました。「ここに一頭だての馬車が4台ある。一台目の馬は御者が走り出させようと思ったら気配に気づいて走り出してくれる。二台目の馬は御者が答で打つと走り出してくれる。三台目の馬は答で打っても動かないので刀で刺すと気づいて走り出してくれる。四台目の馬は、御者が答で打っても刀で刺しても走り出さない。実は、これが多くの人々の有り方なのだ。一頭目の馬は誰に教えられてもなく世の無常を感じて道を求めていく人、二頭目の馬は人の死を見て我がことだと気づき道を求めていく人、三頭目の馬は我が家族の死を見てようやく我がことだと思う人、四頭目の馬は我が家族が亡くなっても人ごとに思って我が命を見つめることができない人だ」と。さて、私たちは何頭目の馬でしょうか。

コロナ感染の拡大にともなって自粛が励行され、さまざまなことが起こりました。大切な年間行事の多くが中止され、飲食店等の諸店舗や博物館・美術館等

も休業をやむなくされ、大学の講義もリモートになりました。冒頭でもお話した「家族に感染させたくないから授業の再開を猶予してほしい」と嘆願した高校生のことや、「コロナ禍で困っていらっしゃる方々に」と多額の寄付をなさったお方のことも、まだ記憶に新しいところです。その一方で、反自肅的行動も見られました。なぜでしょう。それは、私たちの持つ^{げんわう}煩悩に原因があるからです。人には誰にでも我癡^{がご}という「私ということに根幹的に暗い心」がありますので、「私わたし」という我見^{がけん}を起こしてしまいます。そのため同時に、我が身に愛着する我愛^{があい}の心や我が身が一番優れていると驕り高ぶる我慢^{がまん}の心まで引き起こしてしまいます。だから、「私は感染しない」という何の根拠もない思いを持ったり、「したいことをして何が悪い」と思ったりしてしまうのです。我癡は癡^ごという煩悩から起こり、我見は悪見^{あくけん}という煩悩から起こり、我愛は貪^{ごん}という煩悩から起こり、我慢は慢^{まん}という煩悩から起こります。今、私たちは「このような煩悩に振り回されて生きていてよいのか」と、あらためて問われているのです。さて、私たちはどのように生きたらよいのでしょうか。

私は今、龍谷大学仏教学会の会長でもあります。4月の時点で運営にあたる学生（院生）の安全を考えて、すべての学会活動を休止状態にしました。かなり早期で下した判断でしたが、振り返ってみると的確な判断であったなと思っています。大学が社会の動向を見て基準を変更し、レベル2にしたのを受けて、学会活動の一部再開はありえるか否かについて、私より若い先生（学会誌担当編集委員）にご意見を求めました。すると、以下のような答えが返ってきました。「学会誌を出さなくても人は死にませんが、学会活動の再開によって罹患者が出て重症化した場合、院生が死ぬことになるから駄目です」と。この答えを聞いて私は安心しました。業務的にもならず、自己中心的にもならず、全体を見る確かな目をもっている人が龍谷大学には育ってきている。それが喜びでした。学生の感染を防ぐことができれば、ご家族の感染リスクも減らすことができます。皆が他者のために、3密を防ぐ努力をすることが大切なのです。そのことを教えてくれているのが、建学の精神にほかなりません。

龍谷大学の建学の精神は、自己中心になりがちな私たちの有り方を変えていく力を持っています。人の悲しみを見つめて寄り添う人を育てていく力を持っています。そして、人の悲しみを見つめ、思いやり寄り添うことこそが、今の私たちにできることです。折しも、大雨による水害が九州各地や岐阜県等で再び起こりました。私の地方も平成16年に台風の被害を受けましたが、そのとき私は2週間、大学を休んで奉仕作業をいたしました。だから、水害を受けておられる方々の苦悩を私は見えています。しかし、直接に見聞きしなくとも、建学の精神を心の耳で聞いた人は、人の悲しみを想像する力を与えられ、思いやり悲しむ心を育てることができます。今回のコロナ禍、および水害を前にして、どうか家族や友人を大切に思い、悲しみの中にある多くの人たちに目を向けることの出来る心を持ち、行動していただきたいものと念願しています。

合 掌

【著者紹介】

専門：仏教学（唯識仏教・日本仏教）

著書：『心要鈔講読』（単著／永田文昌堂／2010）

『貞慶撰『唯識論尋思鈔』の研究－仏道篇－』（単著／法蔵館／2019）

『蔵俊撰『仏性論文集』の研究』（編著／法蔵館／2019年）

『日本仏教と論義』（編著／法蔵館／2020）

『修二会－お水取りと花会式－』（編著／法蔵館／2020）

その他。